

研究・調査報告書

| 分類番号 | 報告書番号 | 担当 |
|---|--------|-------------------|
| A-161 | 12-018 | 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学 |
| 題名 (原題/訳) | | |
| Alcohol-impaired driving in the United States: contributors to the problem and effective countermeasures. 米国における酒酔い運転：問題への影響因子と有効な対策 | | |
| 執筆者 | | |
| Ferguson SA | | |
| 掲載誌 | | |
| Traffic Inj Prev. 2012 Sep;13(5):427-41. | | |
| キーワード | | |
| 酒酔い運転（「飲酒運転」「酒気帯び運転」の両者を含む言葉）、抑止策 | | |
| 要 旨 | | |
| 目的： 現在行われている酒酔い運転対策の有効性を概説する。 | | |
| 方法： 本稿では、米国における酒酔い運転に影響する因子、および酒酔い運転対策の有効性を俯瞰する。 | | |
| 結果： アルコール濃度が法的限度を超えた場合の運転を抑止する観点、また飲酒運転有罪者の再犯を防ぐ観点、という二つの観点から、過去数十年間に多くの有効な対策が講じられてきた。近年、“強硬”飲酒運転者の問題が注目されている。“強硬”飲酒運転者とは、血中アルコール濃度が高い状態で飲酒運転を繰り返し、その飲酒運転行動を更生させるのが困難な者を指す造語である。このようなタイプの人々に注目することはそれなりに意味のあることだが、それのみに集中することは、酒酔い運転に由来する事故の大部分への対策を怠る結果となる。本稿では、酒酔い運転を減ずるために講じられた主要な対策を概説し、それらの有効性に関する根拠を要約する。そして、投入できる人的・経済的資源が限られた状況で、どこに焦点を絞るべきかという問いにも答えてみたい。 | | |
| 結論： 飲酒運転検問所を頻回に設置し、また広範にその存在を周知させるといった一般的な抑止策が、飲酒運転の被害者を救う上で最も有効な手段だと考えられた。従ってこのような方法が州・地方における酒酔い運転対策の柱となるべきである。飲酒運転歴を有する者の再発予防という焦点を絞った抑止策、すなわち alcohol ignition interlock（呼気のアルコールを感知し、一定の濃度以上の場合にはイグニッションが作動しないロック機能）を備えた車の使用などは、飲酒歴に関わらず酒酔い運転の高リスク運転手に適応すべきである。そのような特定の対策が特定の運転手に有効であるとする根拠が存在する。将来は、発達した車内技術により、運転手が規定以上のアルコール濃度を示す場合運転を不能にする機構が有望視されている。このような機構を備えることで酒酔い運転を劇的に減少させる可能性がある。 | | |